

班名

C 班 第 4 班 「Team-KJ」

メンバー (所属大学, 氏名 ※敬称略)

青山学院大学 桶本みさよ, 大阪電気通信大学 小脇知也, 京都産業大学 菊池麻美,
金城学院大学 足立洋子, 高千穂大学 北田大介, 東京情報大学 高橋雄介,
名古屋学院大学 小西崇之

タイトル

『そのとき学生は気づいた！～学生データ共有のあり方とその効果～』

課題認識

昨今の大学事務は、業務の専門性、多様性、独立性等の中で多種多様な形態を為している。本来であれば各部署が密接に連携することでその効果を十分に発揮できるはずである。

しかしながら、その「情報」はある特定部署にのみ介在するなどの諸問題を抱えていることも事実である。そのような問題点に対し、我々大学職員が日常業務の中で改善できる可能性のある課題について「大学」と「情報」の両者のキーワードから課題を認識した。

キーワード

『気づき』・『一元化』・『即戦力』・『経費削減』・『情報活用・共有』

討議内容

フェーズ 1・・・所属職場が抱えている諸問題点の洗い出しとその共有 (K J 法)

「大学」と「情報」のキーワードで各大学の諸問題点を提起した。

大学が持つ「情報」に関する問題点とは・・・
<ul style="list-style-type: none">各部署間での連携（共有）ができていない。業務上得た情報を担当課のみが保有している。教員の求める情報をリアルタイムに提供できていない。学生サービスの提供には待ち時間を要する。

以上のような問題点・課題にたどり着いた。そして、この課題についてどのような場面でそのようなことが発生しているのかを検証することとした。

フェーズ 2・・・問題点の掘り下げ (K J 法)

フェーズ 1 によって示された課題についてその具体的事象を列挙し、それを要因別に大別した。その結果、以下のグループに大別することができた。

「情報共有」ができていないことが主な要因と思われるグループ
<ul style="list-style-type: none">他部署の業務がわからない。留学生等の就職状況を教員に聞かれても回答することができない。他

「情報活用」ができていないことが主な要因と思われるグループ
<ul style="list-style-type: none">学生に、本人の個人情報を複数課（回）に提出させている。教員などから学生の進路状況データを求められる。他

上記のように「情報共有」と「情報活用」に大別できたが、その内容について調べると、お互いは密接に関連しており表裏一体であることが分かった。

フェーズ 3・・・具体的解決法へのアプローチ（現状事務体制で行える対応について）（K J 法）

フェーズ 2 での結果をもとに、この問題点を解決する具体的方法について検討したところ、今回挙げられた問題点全てにおいて共通的なことは、「情報の共有・活用が必要！」ということであり、これを根本的に解決する方法として、システムの『一元管理化』が必要である。という結論に至った。

具体的には、①各自が作成するドキュメントなどについては、クライアント PC に保存するのではなく、いわゆるパブリックフォルダなどを設け、そこに集約・保存するなどの方法が挙げられる。これにより、複数の職員が共有することができ、若干の加工等を行うことで活用することができる。また、②学生基本情報については、教務システムなどの基幹システムに集約管理し、それを共有することなどの方法が挙げられる。なお、両者についてはある一定の権限設定等によって見ることのできる情報を限定することも可能である。

提案内容

先の討議内容を踏まえ、私達は以下の結論に至りました。そして、この結論は私達事務職員がすぐにでも実践できるものであり、文末の「提言」にその旨を記載します。

【提案・結論】

大学は、主に学生データを『共有化』・『一元管理化』することによって、①各部署間での連携が円滑にでき、②部署間での多重記録の廃止ができることに加え、③一貫性のある学生指導が実現できるというメリットがある。また、学生は web ポータル等から自らの履修や、出席状況などをリアルタイムに確認すること等が可能となる。学生はその行動から、『気づき』を喚起し、その結果、自らが自らに働きかけるといったような『自主性』、『自己管理能力』、『計画力』、『行動力』などの社会人基礎力（出典：経済産業省 HP <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>）を身につけることが可能となる。そして、そのような力を身につけた学生は、自ら新たな課題を発見し、各種資格取得や、成績の向上など、自らが思い描く目標へ精力的に取り組む姿勢を培うことに繋がるのである。

そして、私達事務職員は、学生データが一元管理されることによって、事務作業の効率化・『省力化』が可能となり、その時間を活用して、より一層の学生サービスを提供することができるのである。

また、このような取り組みをしても『気づき』の喚起ができない（その可能性が著しく低い）等の学生には、職員が『省力化』によって節約できた時間を活用して個別集中的にケアすることによって、最低限度の社会人基礎力を身につけさせることができる。

— 提言 —

私達は、『情報活用（システム共有）』を通じて、『学生サービス向上』を実現し、『社会に貢献しうる学生を輩出すること』に貢献します。